

小林恭子の ロンドン発 グローバル随想

第35回

ロンドンから長崎へ つながる日英



イラスト・題字：長峯亜里

平和の鐘を鳴らす

前回のこのコラムで、1945年8月に広島と長崎に投下された原爆で被爆した方たちの証言を集めたBBCの番組『アトミック・ピープル』を紹介した。この中で、毎月9日午前11時2分、世界平和を願って、長崎の平和公園内にある「長崎の鐘」を鳴らす催しがあることを知った。

今年10月、筆者は東京に住む家族のケアのために一時帰国したが、その合間を縫って、初めて長崎に飛んでみた。9日の朝、平和公園に出かけてみると、修学旅行の生徒たちでいっぱいである。

「長崎の鐘」は長崎県被爆者手帳友の会(設立1967年)が設置したものだ。午前11時少し前、鐘の前に行ってみると、すでに数人が集まっていた。鐘には何本もの白い綱がつながれていた。『アトミック・ピープル』に出ていた、100歳の被爆者 中村キクヨさんの姿を見つけ、中村さんのすぐ後ろに立ってみた。午前11時過ぎ、綱を手にとってみんなと一緒に鐘を鳴らした。鐘の音が響く度に「どうかこの音が世界中に届きますように」と願った。同時に、過去の原爆投下や現在も世界各地で戦争が起きていることを思うと、涙が出そうにもなった。鐘を鳴らし終えて、中村さんの手を握った。「生きていて

くださって、ありがとうございます」。中村さんの小さな体に、東京の家で待っている、90歳近い母の姿が重なった。

この場にいた1人が、被爆者手帳友の会で活動する井原和洋^{かずひろ}さんである。友の会の定例会が近くの事務所であると聞き、一緒に事務所まで歩いた。井原さんの叔母 井黒キヨミさんは19歳で被爆し、被爆体験を記した自分史などを通して平和を願い続けたが、昨年秋、97歳で亡くなった。

定例会には友の会の会長で日赤長崎原爆病院の名誉院長でもある朝長^{ともなが}万左男^{まさお}先生も出席し、全員でのり弁を食べながら今後の活動について話し合う様子を見学させてもらった。筆者は部外者だが、長崎の平和活動の一端を知ることができた。



「長崎の鐘」の前に立つ中村キクヨさん (筆者撮影)